



## Story

幼なじみの真奈美と恋人になったばかりで浮かれていた僕は、彼女が苦しんでいたことに気づけなかった。まさか真奈美が氷泳部のコーチにレイプされ、しかも僕の知らないところで何度も辱められていたなんて……！

「感じてない、感じてなんかいないんだから！」

処女を奪われ、様々な調教をほどこされる真奈美の抵抗はあまりに弱く、儂い。

「見ないで……お願い栄治、こんな私を見ないで……ああっ、イク、イカされちゃう……！」

コーチに開発された若い女体が僕の目の前で激しく痙攣し、絶頂する。

真奈美、真奈美！……僕にできるのは、ただ愛しい人の名を呼び続けることだけだった。

「だっこい奪恋し寝取られた幼なじみ」

あおはし青橋ゆたか由高

(著)

・あんどどうも安藤智也

(イラスト)

プロローグ／恋人との、夏	4
第一章／犯された幼なじみ	12
第二章／墮とされた幼なじみ	49
第三章／寝取られた幼なじみ	95
エピローグ／恋人との、冬	129
あとがき	133
電子版あとがき	139

プロローグ／恋人との、夏

朝、一緒に待ち合わせて学校へ行くあいだ。

昼、一緒に弁当を食べるあいだ。

そして、部活が終わってから自宅へ帰るまでのあいだ。

それが蓮見栄治はすみえいじと壬生真奈美みぶまなみ、二人が共に過ごせる大切な、そして幸せになれる時間だった。

真奈美は栄治と同じ校二年生。同じマンションに住んでいたことから、子供の頃から知っている、いわゆる幼なじみだ。

真奈美が私立の中学に進んだことで一旦疎遠になったが、偶然同じ校に進んだことで再会。しかも同じ水泳部となり、二人の仲は急速に接近した。

「ね。どうして栄治は水泳部に入ったの？ 中学のときは陸上部だったんでしょ？」

「……なんで今頃そんなこと聞くのさ」

二年生になった今年の春、真奈美が発したその質問がきっかけだった。

「だって、栄治ったらなかなか言ってくれそうになかったんだもん」

真奈美がのちにそう語ったように、それは明らかに

煮え切らない栄治への呼び水だった。

「聞きたいの。どうしても」

街灯に照らされた桜並木の下、なにかを期待するように自分を見つめる真奈美の瞳を、栄治は今も鮮明に思い出せる。恐らく、一生忘れることはないだろう。

「……真奈美がいたから。真奈美がいたから、僕は水泳部に入ったんだ」

栄治は声を裏返さないよう必死に自制しながら、どうにかそう答える。

だが、真奈美はそんな答では納得してくれなかった。

もっと具体的な、もっと明確な答を目の前の少女は求めていた。

「どうして？」

真奈美はもう一度「どうして？」と繰り返す。

だから栄治は、ありったけの勇気を振り絞って生まれて初めての告白を口にした。

「お前が好きだからだ。できるだけ真奈美の側にいたかったから、僕は水泳部に入ったんだ……！」

そしてこの夜、二人は「幼なじみ」から「恋人」になった。

「ん……んふ……う」

真奈美の唇を割って、恋人の舌が潜り込んできた。

(やだ、栄治だったら……もうっ)

栄治から告白を引き出したのが四月。

初めてのデートが五月のゴールデンウィーク。

ファーストキスは六月。

そして今、七月。

(そ、そりゃ私だって、いつまでも拒むつもりはないけど……っ)

キスは好きだったし、こうして舌を絡め合い、唾液を交換するのも嫌いではなかった。できればもう少し落ち着いて欲しいとは思っていたけれど、恋人と交わす深いキスは少女を恍惚とさせてくれた。

ただ、最近の栄治はすぐに真奈美の胸を触ろうとしてくる。

(せめて、もっと優しく……っ)

ブラウスの上から乳房をまさぐられるたびに、真奈美は眉根を寄せて栄治の手を振り払おうとする。

中学生に上がった頃から急激に膨らみ、今も毎年着実に成長を続けるバストは、強く揉まれると快感よりも痛みが先立つのだ。

「や、やめて……!」

しかしいくらそう告げても、童貞少年は若い欲望に我を忘れ、乱暴に乳肉を揉んでくる。

「ご、ごめんっ。痛かったか？」

真奈美が睨むと、ようやく指が胸から離れる。

「バカっ。もっと優しくしてって何度言わせる気よっ」

「ごめんってば。今度は優しくする」

「あっ、ダメ、ここじゃイヤ……ああっ」

栄治の指がブラウスのボタンを外していく。薄暗い部室に、白い肌と淡いピンク色のブラが浮かび上がる。

「ダメよ。さっき、せっかくシャワー浴びたのに……やん」

そんな弱々しい拒絶は完全に無視され、ブラが外される。ワイヤー入りのカップに包まれていたFカップの柔乳がぶるりと現れる。

「綺麗だ。何度見ても真奈美のおっぱい、凄く綺麗だ」

「やだ、あんまりじろじろ見ないでよ。恥ずかしいんだから……あ」

最近また膨らんできたバストは水泳選手としては邪魔な存在だったが、女としては誇らしげなものである。それを恋人に褒められて嬉しくないわけがない。

水泳で鍛えられた胸筋に支えられた砲弾状のバストは、重力を感じさせないほどにツンと上向いていた。淡い色の乳首が堂々と斜め上方を示している。



(あん。乳首、勃っちゃってる。恥ずかしい……)

栄治の愛撫は確かに痛みを覚えるのだが、まったく快感がないわけでもない。乳房へのタッチを許すようになってから急速に全身が敏感になってきた気もする。「さっきはごめん。代わりに、こっちで気持ちよくしてやるから」

「ンン……!」

僅かに尖っていた乳首を口に含まれた瞬間、真奈美の背中に電流が駆け抜けた。

ちゅぷちゅぷと音を立てて乳首をしゃぶられるたびに、下腹の奥が切なく疼く。

「えい、じい……あ……んあ……っ」

左右の乳首を激しく舐められ、同時に乳房を直接揉まれる。

先程とは違い、優しく、気遣うような愛撫に、次第に吐く息が熱くなっていく。

「僕のも触って」

「ん」

ズボンから飛び出した恋人の若いペニスを握らされた。

(熱いし……硬い)

何度触っても、勃起の逞しさと熱には慣れない。拙い手コキにもかかわらず、童貞少年はすぐに呼吸を乱

し、腰をかくかくと震わせる。

(あ、イクんだ。栄治、また私の手に出しちゃうんだ)

「ぐっ……ウウ！」

真奈美の豊かな胸の谷間に顔を埋めたまま、栄治が欲望の凝縮した白濁汁を吐き出す。

(出てる……ああ、今日も凄く熱い……！)

恋人のほんのり甘い体臭を嗅ぎながらの射精は、オナニーとは比べものにならない快感だった。

(ああ、真奈美のおっぱい、ぶるぶるして気持ちいい……！)

表面は柔らかいが、弾力に充ち満ちたバストはまさに極上のクッションだ。

「こら栄治、いつまでぼんやりしてるのよ。早く後始末しなさいよ。校門、閉められちゃうわよ？」

ほんのり紅潮した恋人がお姉さんぶった口調で栄治を現実へと引き戻す。

「あ、ごめんごめん。……ん？ 真奈美、こんなところでほくろあるんだ？」

「きゃっ！ どこ見てるのよ、もう……！」

左の乳房の下側に、小さなほくろが見えた。

「うん。昔からね。自分じゃ見えないんだけど」

「そりゃ、こんだけでっかいおっぱいしてりゃあね」  
両手でたぶたぶとバストをいじりながら言うのと、

「バカ！ スケベ！」

「いててっ！」

思い切り頬をつねられた。

こんな甘い時間が永遠に続くと思っていた、  
■校二年生の夏。

少年はまだ知らない。自分の恋人を狙う者の存在を。

少女もまだ知らない。自分の肉体に潜む淫猥な欲望を。

そして物語は幕を開ける。

## 第一章　犯された幼なじみ

瀧沢たきざわがこの私立■■校に体育科の教師として招かれたのは昨年のことだった。瀧沢は今年で教師生活四年目の二十六歳。学生時代は水泳もやっていたが、熱心に打ち込んでいたわけではない。大した実績も残していない。

そんな瀧沢が着任と同時に水泳部の指導を引き受けたのは、二つの理由があった。

一つは、顧問である女教師さゆりの存在だった。

さゆりは瀧沢の三つ歳上の先輩教諭で、専門は英語。水泳のことはほとんどなにも知らず、いわゆるお飾りの顧問だった。

瀧沢が水泳経験者だと知ったさゆりに顧問を手伝って欲しいと頼まれたとき、一度は断った。が、さゆりの熱心な勧誘と、なによりその美貌と成熟しかけた肉体に目がくらみ、結局はコーチという立場でなら引き受けることにした。

この学校は施設こそ立派だが、それほど部活動に熱心ではない。水泳部もその例に漏れず、そこそこ練習して、そこそこ楽しめればそれでいい、というスタンスだった。

(これくらい緩いほうが俺も楽でいいしな)

瀧沢も、指導こそするものの、部員に厳しくすることとはしなかった。そんな面倒なことをするくらいなら、もっと楽しいことにエネルギーを使うべきだというのが瀧沢の考えだった。

瀧沢が最初にしたことは、さゆりへの凌辱だった。

水泳部の方針について話し合いたいと誘い出し、力尽くで強姦。そのまま徹底的に犯し、鬨り、薬の力も借りて屈服させるのに、それほどの時間はかからなかった。

「瀧沢せん……ご主人様。ご指示のとおり、彼女を二階に呼び出しておきました。彼にもあとでここに来るよう連絡してあります」

部員たちの去ったプールサイドに立っていた瀧沢に、競泳水着姿のさゆりが近づいてそう告げた。

ここ最近、色っぽくなると職員室でも評判のさゆりは、瀧沢の下僕となってますで一年近くが経過している。瀧沢を拒めたのは最初だけで、性の悦びに目覚めさせられた女教師は、今ではすっかり従順な牝奴隷に墮とされていた。

「でも……本当に彼女を……壬生さんを……？」

さゆりが不安そうに瀧沢を見るが、その瞳には服従する相手への媚びが浮かんでいる。

「なんだ、教え子が哀想になったか？」

「それもなくてはいいですが……その、ご主人様を奪われるのではないかと不安なのです」

さゆりは瀧沢を「ご主人様」と呼ぶ。二人きりのときはそう呼べと命令されているからだ。

「私はもう若くはありませんし、いつご主人様に捨てられるか不安です」

「ふん、そんな心配する暇があったらお前も泳げ。その見事なプロポーションを維持してるあいだは、しっかり可愛がってやるぞ？」

「あ、は、はいっ」

瀧沢の言葉に、先日の誕生日で二十九歳になった女教師が嬉しそうにプールに飛び込む。

（御しやすい女は可愛いもんだ。あのエロい身体もまだまだ捨てられねえな）

瀧沢の指示でわざとキツめの水着を着せられたさゆりの泳ぎを、サングラスで隠された鋭い目が追う。瀧沢がコーチしたおかげで、今ではなかなかの泳ぎっぷりだ。

（あの熟した尻もいいが……やはり若い女、それもデカイ胸は別腹だからな）

酷薄そうな薄い唇を片側だけ持ち上げ、小さく笑う。  
（さて、若い獲物は久し振りだ。愉しませてもらうと

するか。くくっ)

(さゆり先生、私になんの用だろう?)

顧問のさゆりに呼び出された真奈美は、プールの二階にあるモニタールームで所在なげに立っていた。

(私は平部員だし、部活のことなら部長か副部長に言うよね)

呼び出される理由に心当たりがない真奈美が首を傾げていると、ようやく部屋のドアが開いた。

「あ、さゆり先生……えっ、コーチ? どうして?」

しかし現れたのはさゆりではなく、瀧沢だった。いつもジャージ姿でサングラスを愛用するその風貌から、生徒はみな「コーチ」と瀧沢を呼んでいる。本人も気に入ってるらしい。

若く長身で引き締まったその外見は女生徒からは人気があるようだが、真奈美はこの体育教師にあまりいい感情は抱いていない。

(この先生、ときどき変な目で私を見てるし)

練習を終えたばかりの真奈美は濡れた競泳水着の上にパーカーを羽織っただけの格好だ。半ば無意識に胸元を隠すように腕を組む。

「あの、さゆり先生は……?」

しかし瀧沢はなにも答えず、モニタールームの端に引かれたカーテンを少し開き、「来てるな」と低い声で呟くだけだ。

モニタールームという名称だが、プールの推量や温度、塩素などを管理しているわけではなく、上からプールの様子を監視するための部屋である。対抗試合をするときなどはここから実況も可能だ。

「コーチ……？」

濡れた水着をパーカーで隠しながら、真奈美は言い様のない不安を覚えていた。

「見えるか？ 蓮見がいるぞ」

「栄治が？」

カーテンの向こうにあるガラス窓からプールを見ると、確かに栄治の姿があった。すでに制服に着替え終えた恋人は、プールサイドで水着姿のさゆりとなにやら話をしていた。

真奈美同様、栄治も平部員なので、顧問の教師と二人きりで話し合うことなどあまりないはずだ。

(なにを話してるのかしら)

ガラス窓の前に置かれたテーブルに両手を着き、身を乗り出して二人の様子を凝視していた真奈美は、だから、瀧沢が部屋の鍵をロックしたことにも、背後に忍び寄っていることにも気づけなかった。



(……え?)

瀧沢にいきなり抱き締められたときも、両腕を後ろ手に縛り上げられたときも、真奈美はまだ己の身になにが降りかかったのかを理解できないでいた。

なにが起きたのかわからないうちは、悲鳴を上げることにも、助けを呼ぶこともできない。このときの真奈美は、ただただ困惑していただけだった。

両手首をヒモのようなもので強く縛られたその痛みにも、真奈美は初めて自分が瀧沢に襲われていることに思い至った。

「コーチ、なにを……っ！」

しかし、真奈美が抵抗するより早く、瀧沢は手慣れた様子で教え子を拘束していた。

両手はキツく縛り上げられ、顔はテーブルに押しつけられている。ひんやりとしたテーブルの感触が妙にリアルで、それが改めて真奈美をぞっとさせた。

「くっ、もっと暴れられるかと思ったが、案外楽だったな。ま、こいつを使うのは好きじゃないから、助かったが」

わざとだろう、真奈美のすぐ目の前にごとりと置かれたそれは、スタンガンと、不気味に刃先が光るナイフだった。

「さゆりのときは両方使ったからな。アイツ、処女で

もねえクセに散々暴れて、大人しくさせるのに苦労したぜ？ ま、一度ぶち込んでからはすぐにヒイヒイよがりやがったがな」

その野卑な言葉遣いに、処女の本能が最大級の警報を鳴らす。なにより、さよりの名が出てきたことに真奈美はおののいた。

「や、やめてください！ さっさとこれを解いて！人を呼びますよ!？」

それでも気丈に叫ぶが、瀧沢はまったく怯む様子もなく、机に俯せにされた少女をにやにやと見下ろしている。己の優位を確信している者の余裕だった。

「呼べるものならな」

「……え？」

「ここから実況できるような程度防音になってるし、そもそも、このプールに残ってるのは俺とお前、そしてあそこの二人だけだ」

顎で階下の栄治とさゆりを示す。

「思い切り叫べば、あるいは聞こえるかもしれねえな？ だけどいいのか？」

「ど、どういうことですかっ」

声が震えていた。膝から下にも力が入らなくなっている。

「蓮見がお前を助けに来るまでのあいだ、つまりあそ

ここからダッシュして階段駆け上がった、どうにか鍵を開けるかドアをぶち破るまで……そうだな、どんなに早くても五分はかかるな。実際は、もっと手間取るだろう」

「そ、それがなんなんですか。コーチだってここから逃げられないんですからっ」

「勘違いするな。俺は逃げねえ」

「え？」

「そのあいだ、俺はお前を犯す。ここでお前を押し倒し、ひん剥き、マ×コを貫き、子宮にたっぷりザーメン注いでやる」

「ひ……っ！」

「確かに俺は手が後ろにまわるだろうさ。だがな、そんなときやお前も道連れだ。恋人の前でレイプされた姿を晒し、男に犯されたとみんなに知られるんだ」

「そ、そんな……ひどい……私がなにをしたって言うんですか！」

絶望で目の前が真っ暗になった。

「さあ、考えろ。ここで俺に一度だけ抱かれて日常に戻るのと、一生を台無しにするのと、どっちがいいかな」

「選べるはずが……あうッ！」

背後の瀧沢を睨んだ瞬間、真奈美は乱暴に胸を揉ま

れていた。

「へへっ、思った以上のデカさだな。しかもさゆりと違って弾力がある」

「イヤ、やめて、触らないで！ イヤーッ！」

水着の上からではあっても、栄治以外の男に触られるのは絶対に嫌だった。

（こんな男に……こんなヤツになんてイヤっ！）

後ろ手に縛られたままだったが、自由になる両脚をばたつかせて抵抗する。水泳で鍛えた長い脚でこの卑劣な男を追い払おうとするが、

「いいぞ、それくらい抵抗してくれたほうが愉しめるからな」

瀧沢は腹立たしいほどに落ち着いていた。

「この、このお！……ああっ!？」

まずは片脚を止められ、足首をがっちり握られる。もう一方の脚もあっさり脇に抱えられ、真奈美の決死の反撃もここで潰えてしまう。

「いいキックだったぞ。大会でもこれくらい力強くできれば、もっといいタイムが出るんだがな」

瀧沢のそんなセリフに、少女の心までもが削られる。「だが、間違っって金的なんかさされたらたまらんからな。悪く思うなよ？」

「イヤ、なにを……やめて……あああ！」

水泳で引き締められた細いウエストに腕を巻かれ、そのまま軽々と持ち上げられた。

「暴れると落ちるぞ？ そら、ここがベッドだ」

「きゃあ！」

いつの間に用意されていたのか、バスタオルの敷き詰められた床の上に乱雑に寝転ばせられた。手が使えないため、余計に衝撃が大きい。

(い、痛い……っ)

真奈美が背中と肩の痛みに顔をしかめる。

「さて、特別に個人レッスンをしてやるぞ壬生……いや、真奈美」

「か、勝手に名前を呼び捨てにしないで！ ああっ！」

瀧沢が腹に馬乗りになる。たださえ体格と腕力に差がある上、手が使えない状態の真奈美にとって、これはまさに絶体絶命の体勢だった。

「くうっ！ くっ、ううっ！」

「はは、いいぞ、もっと暴れて見せろ、真奈美！」

両脚を使って瀧沢の頭を蹴ろうとするが、こんな不十分な体勢から放つキックに大した威力はない。瀧沢はそんな真奈美の悲壮な抵抗を愉しんでいるようにも見えた。

(こんな……こんな男に屈したくない……！)

瀧沢は蹴りを封じ込めるフリをして、真奈美の太腿を撫で回してくる。栄治にも数回しか触らせてない内股を卑劣な男に撫でられるのは、死にたくなるほどの屈辱だった。

「なるほど、さすがに筋肉質だな。だが、男を知ればもっと柔らかい肉になる」

「き、気色の悪いことを……っ」

「さゆりも最初は似たようなことを言ってたぞ。だが俺のチ×ポを知ってからはまるで別人のように男好きのする女になったがな」

さゆりが綺麗になった、女らしくなったという話は、真奈美たち生徒のあいだでもされていた。だが、まさかそれが目の前の悪辣な男によるものだと信じたくなかった。

「くくっ、それじゃそろそろお前の身体を拝見するとするか」

「やめ……やめてっ！ イヤ、イヤアアア!!」

パーカーを荒々しくはだけさせ、まだしっとりと濡れたままの競泳水着を露わにする。水を吸った生地はただでさえフィットした女体によりびっちり張りつき、若いボディラインを浮き上がらせていた。

インナーなしでも透けないよう作られてはいるが、こうして至近距離で見れば、その豊かなバストの頂点

は僅かに膨らんでるのがわかるし、股間の盛り上がった部分にはうっすらと魅惑の縦スジも確認できる。

紺色の生地と白い肌のコントラスト、そして半分脱げかかったパーカーがどこか淫らがましい雰囲気を漂わせる。

「イヤ……見ないで……見ないでよお！」

「ふん、なにを恥ずかしがる？ いつもこの格好で泳いでいるんだらう？ このバカみたいにデカイおっぱいも、このくぼんだへそも、そしてこのマ×コの食い込みも、全部見られてたんだぞ？」

「違う、違う違う、違うう！」

いやいやをするように顔を左右に振るが、瀧沢のねちっこい言葉責めは続く。

「男子はみんなお前のこのスケベな水着姿をオカズにチ×ポしごいてるぜ？」

「知らない……そんなの知らないっ」

同じ部の男子生徒の顔が次々と浮かび、真奈美は羞恥に頬を染める。

「飛び込む直前のお前の乳がどんだけエロく揺れてるか教えてやろうか、ん？」

そして、再び乳房を掴まれた。

「ひいい！ やだ、やめて、触らないでっ！」

両手で左右の膨らみを同時に責められるが、さっき

とは違い、その手つきは穏やかだ。手のひら全体でバストを包み込み、やんわりと柔肉に触れてくる。

「ふふ、いい弾力だ。生もいいが、濡れた水着越しの感触も悪くない」

「やっ……やめて……やだ……こんなのやだ……あ」

最初は撫でるだけだったのが、それが徐々に変化していく。

「くっ……ふっ……やめて……やめてよお……うう……っ」

小指から順に薬指、中指、そして人差し指の順にゆっくり、ゆっくりと力が込められ、乳房の裾から頂点に向けて絞っていくような愛撫をされた。

栄治の拙いタッチとはまるで異なるその触り方に、

真奈美は恐怖を覚え始めた。

（イヤっ、なにこれ……こんなのダメ……ダメ……え！）

痛みはない。いや、痛みがあったほうが真奈美にはよかっただろう。

（ダメ、感じてなんてない……気持ちよくななんてない……！）

恐ろしいのは、この凶悪な男の愛撫に、自らの肉体が反応を示していることだった。

「くう、うっ、ふううう……うっ……イヤ……イヤ……



…やめ、て……っ」

まだ芯の残っている若い乳房にとって、こうした優しく、そして粘着質な責めは一番相性が悪かった。

じわじわと甘い悦びがバストから全身に広がっていく。水着越しでもはっきりそれとわかるほど水着は硬くしこっていた。

(やだ、私の乳首、あんなに……！)

生地にくっつきりと浮き出た双つのポッチに、真奈美は赤面する。

まだ一度も触れられてないのに隆起してしまった己の突起が恥ずかしくてたまらない。

そして真奈美を困惑させているのは、この憎むべき男がさっきからなにも言わなくなったことだ。

無言のまま、黙々と真奈美の胸を愛撫し、それでもう隠しようのないほど尖った乳首を視姦してくる。

二人きりの部屋には、真奈美の苦しげな吐息だけが満ちていく。

(へへっ、想像以上の身体だぜ……！)

両手に伝わる若い弾力に、瀧沢は心のなかで舌を巻いていた。

(このサイズでこの感度……たまんねえ！)

真奈美を初めて見たのは今年の春だったが、そのときは「それなりに可愛いし、胸もデカイ。だがまだガキだ」という程度の評価だった。顧問のさゆりのほうに興味があった。

その評価が変わったのは、一年後の今年からだ。

同じ部の蓮見栄治と付き合い始めたと同時に女としてぐんぐん美しくなり、そして男を惑わせるフェロモンを纏いだしたのだ。

ちょうど、さゆりとの行為にもマンネリを覚えていた時期だったのも後押ししたかもしれない。

壬生真奈美を俺のモノにする。

そう決めた瀧沢の行動は早く、計画してから僅か半月でここまで持ってきたのだ。

「やめてください……今なら黙ってますから……誰にも言いませんから……あ」

真奈美の反応が明らかに変化していた。敵対意識剥き出しだったのが、もう哀願口調になっている。目尻に浮かぶ涙も真奈美の心情を表していた。

(ここでやめるバカがいるかよっ)

瀧沢はよりねちっこい愛撫で真奈美の懇願に応えた。なにも言葉を発しないのはもちろん作戦で、真奈美に様々なことを想像させるのが目的だった。

(女は勝手に色々なことを考えるからな)

この感じやすい胸を執拗に責め続けてるのに、敢えて乳首に触れないのも策のうちだ。じわじわと性感を高め、戻れない場所まで押し上げてから一気に攻め堕とす。それが瀧沢の得意とする戦法なのだ。

一昨年まで勤務していた女子校でも、こんなふうにして美少女をモノにしたことをふと思い出す。

(くく。そういやあの女、今頃どうしてるかな。だいぶ俺にまとわりついていたが)

かつて墮とした女生徒が鬱陶しくなったのも、この学校にやって来た理由でもある。

「うっ……うあああ……やめてください……もう、もう……あああ」

よほど敏感なのだろう、水着の上からの愛撫だけで、真奈美は全身にねっとり汗を浮かばせ、悩ましげな吐息を漏らしている。

(しかし……凄いな、こいつは。これでマ×コいじったら、それだけでイクんじゃねえか?)

右手で乳房への責めを継続しつつ、左手をゆっくり下へと移動させる。

「ひっ……ひい!？」

脇腹、へそ、そして腰骨の周辺を指の腹で丁寧に撫でる。

「や、だ……やだやだ、やめて……触らないで……ア

ア！」

そして太腿の側面、表面、内股に行くと見せかけて膝小僧、再び戻って太腿。

「ああっ、はっ、はあああ……」

（敏感なのは胸だけじゃねえな。コイツ、磨けば化けるか……!?)

プールの水はすでに乾き始めているが、真奈美かいた汗を吸って水着が黒く湿っていく。狭い部屋に漂う甘酸っぱい匂いは、紛れもなくこの少女の発したものだ。

（いいぞ、このままイカせてやる。そして、俺から離れられなくしてやる……!）

凶悪な光を瞳に宿らせた瀧沢は、遂に指を真奈美の股間へと向かわせた。

（ダメ、こんなの違う……違うんだから……!）

自分自身にそう言い聞かせる必要があるほど、真奈美の肉体は意志とは無関係に女の反応を見せ始めていた。

乳房の先端は水着と擦れて痛むほどしこり、瀧沢に撫でられたウエストや太腿は熱く火照っている。

一番敏感な乳首と秘所を觸られてないのは不幸中の

幸いだったが、逆にそのせいで快感が蓄積されていくのは皮肉だった。

そしてこの強姦魔は、いよいよ真奈美の本陣へとその魔手を伸ばしてきた。

「そ、そこはダメです、触らないで……やめて、そこだけは……あーっ！」

丁寧処理をしたビキニラインを指先で数回なぞった指が、遂に真奈美のクレヴァスを撫で上げた。

「ひいいいっ！ やっ……イヤアア！」

慌てて股を閉じようとしたが、それより早く瀧沢が自分の足をねじ込み、それを遮る。

（やめて、触らないで！ そこはまだ栄治にも許してないんだから！）

栄治が触れたのは太腿までだ。もちろん、真奈美は処女だ。この身体を貪った男はまだ誰も存在しない。

「ひっ……やっ、やだやだ……ああ、許して……もう許してください……んん……！」

乳房のときとは異なり、秘裂への愛撫は最初からかなり強烈だった。

（そ、そんなに激しくしないでっ、私のアソコ、指で擦らないでえ！）

太い指が水着の上から処女のワレメを責める。肉豆から膣穴まであいだを激しく往復するたびに、摩擦音

が部屋に響く。

最初は乾いた音だったそれが次第に湿った、淫らかな水音に変わるのにそれほど時間は要しなかった。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

「イヤ……イヤ……イヤ……っ！」

瀧沢の指が処女の性感を的確に掘り出して来る。しかも、わざと音が立つように指を動かしてくるため、真奈美はいっそう羞恥に身を焦がす。

(違うの、こんなの私知らない……あぁ、どうして、どうしてこんな……っ)

自慰を知らないわけではなかった。特に栄治と恋人となり、互いに触り合った夜などは激しく己を慰めたし、達することもしばしばだった。しかし、

(でも、こんなに凄いの知らない……私の身体、おかしくなっちゃってる……！)

直接触られていれば、あるいは痛みを感じたかもしれない。だが水着越しのため、多少激しいくらいの愛撫が逆にちょうどいい刺激となって真奈美を悩乱させる。

「うっ……ふううっ、んうう……っ」

歯を食いしばり、目を強く瞑ってこの感覚を追い出そうとするが、それを許すほど瀧沢も甘くはなかった。

「さて、そろそろ生乳を拝ませてもらうぜ、真奈美」

真奈美が目を閉じたその隙を見逃さず、瀧沢が水着を乱暴に引き下ろした。

「えっ……あ、ダメ……やめてええっ！ イヤ、見ないで……見ないでえっ！」

慌てて身をよじるが、もう遅かった。処女の肌を覆っていた競泳水着は呆気なくひん剥かれ、恋人以外に見せたことのない見事な乳房がぶるりと露わになる。

「おお……っ！」

瀧沢が息を呑んだのがわかった。そして、その血走った目が舐め回すように真奈美の美巨乳を視姦してくる。

「イヤアッ！ 見ないで、おっぱい見ないでえええ！」

片側だけバストを剥かれた競泳水着姿の美少女が泣き喚く。が、そんな姿は男の獣欲を刺激するだけだ。

（見てる、コーチが私のおっぱい見てる！）

しかも、今、この乳丘の頂点は浅ましいほどに勃起しているのがさらに真奈美を追い詰める。

（やだ、勃ってる……私のおっぱい、あんなにエッチに尖ってる……っ）

恥ずかしくて辛いのに、そこだけは物欲しげにそそり立っている。

「へへっ、なんだよこのスケベな勃起乳首は。俺に揉

まれて、しゃぶって欲しくなったのか、ん？」

久々に開かれた瀧沢の口から出てきたのは、聞くに堪えない言葉だった。聞くだけで耳が犯されるような下劣な声に、真奈美は悔し涙を零す。

「違う……誰があなたなんか、にいいいいっ!？」

この男に屈するものかと少女が懸命に振り絞ったその勇気を、根こそぎ奪うような衝撃が真奈美を襲った。剥かれた乳首を口に含まれると同時に、股布の隙間から指をねじ込まれたのだ。

(嘘、嘘、嘘……イヤ、やめて……こんな……嘘よお!)

ずっと焦らされ続けて過敏になったピンク色の突起を甘噛みされ、さらに意志を裏切って濡れそぼった秘口を指でいじられる。

この苛烈な不意打ちに、真奈美は不覚にも望まぬ絶頂を迎えてしまった。

「ひいいいっ……ひっ……いひ……い!!」

後ろ手に縛られたまま、まるで芋虫のように床の上でのたうち回る。

(やめてやめて、おっぱい噛まないで、舐めないで……吸わないでえ!)

普段の倍以上の体積になった乳首が前歯で噛まれ、ぬらりとした舌で舐められ、そしてかさついた唇で強



く吸い上げられる。

(触らないで、そこダメなの、お願い、そこだけは許してよお！)

水着の隙間から侵入した指が処女の窪みをまさぐる。熱を帯びた粘膜を指で撫でられるだけで、意識が飛散するような鮮烈な快感が走り抜ける。

「イヤ、イヤ……イヤ……ア！」

「へへ、イッてるな？ いいんだぞ、思い切り声を出しても。運がよけりゃ、下のプールにいる蓮見に聞こえるかもしれないねえしな？」

(栄治……助けて、栄治い！)

しかし真奈美の口から出たのは助けを呼ぶ声ではなく、

「ひっ、ひぐっ……ふううう、ふっ、ふぎ……い！」

アクメを悟られまいと必死に堪える、哀れな処女の呻きだけだった。

(こんな……嘘、こんなの嘘よ……)

絶頂したにもかかわらず、瀧沢はしつこく真奈美の女体を責め続けてくる。

「いい感度だ。これなら最初からイケんじゃねえのか？」

限界まで膨張した乳首は、唾液でふやけるのではないかと思うほどしゃぶられている。舐められるたびに肢体が溶けていくような甘い悦びを得てしまうこの身が恨めしい。

「やめ、て……もう、許して……これ以上されたら私、きつと……んああッ！」

過敏になった乳首をまた軽く噛まれてしまった。床から背中が浮き上がるほど身体が跳ねる。

「いいねいいね、たまんねえよ、この反応」

「うっ……ううっ……イヤァ……もうイヤなの……お」

甘噛みされて疼く乳首に、またも舌が襲いかかる。

緩急をつけた愛撫に、処女の身は抵抗することすらできない。

そして、真奈美を困惑させている最も大きな要因は、（そこ、ダメ。お願い、それ以上はダメ！ 指、もう挿れちゃダメなのに！）

望まぬ絶頂ではぐれてしまった膣道に潜り込んだ瀧沢の指だった。

「へへっ、きゅうきゅう締めつけてくるぜ。どうだ、自分じゃここまで挿れたことないだろ？」

真奈美がヴァージンであることはすでに知られてしまった。

その上でこの卑劣な悪魔は、真奈美の処女膜を傷つけぬように指を根元まで挿入し、本人ですら未踏の褻肉を嬲り始めたのだ。

「ウツ……ウウ……ダ、メ……やめて……アア、そこ、指、ダメ……あはァ！」

真奈美のオナニーはもっぱら乳首とクリトリスへの刺激だったので、膣道へのこの責めはまさに未知の世界だった。

「破れちゃう……私、初めてじゃなくなっちゃう……抜いて……ああ……あ」

「平気だ。膜はそう簡単にや破れねえって。……お、ココか、ココだな？」

瀧沢の指が真奈美のGスポットを捉える。

(な、なに、なんなのこれっ!? やだ、おしっこ漏れちゃう……!?)

意志とは関係なくもたらされた尿意におののくが、瀧沢はそれ以上そのざらついた箇所を責めてはこなかった。

「安心しろ。ちゃんと潮噴きも教えてやるさ。今はスポットの場所を確認しただけだ。……おほっ、マン汁たっぷりだな？」

「ひう……ン！」

膣道から引き抜かれた指には、恥ずかしい体液がべ

っとりとこびりついていた。

底意地の悪い男はわざわざ白濁した分泌液の付着した指を真奈美の鼻先に見せつけてくる。

(やだ。なんで……どうして私、あんなに……！)

恥ずかしさに横に向けた顔を、瀧沢が野卑な笑みを浮かべながら見下ろす。

「さて、そろそろ真奈美のマクをいただくとするか。

……おら、見ろ」

「え？……ヒイツ！」

瀧沢の股間にそそり立ったイチモツを見た瞬間、真奈美の口からは鋭い悲鳴が漏れていた。

(なに……なんなのアレ……嘘……違う……栄治のは全然違う……！)

何度か手でしてあげたことのある恋人のペニスとはまるで違っていた。

「どうだ、これが大人のチ×ポだ。まあ、俺のはそのなかでも特大だがな？」

自慢するだけあって確かにそれは見事なサイズと形を誇っていたが、処女にしてみればただの畏怖の対象でしかない。しかも、自分が知っている勃起と比較して二回りは巨大なのだ。

「や、だ……無理、そんなの……ああ、やめてください、お願いです、なんでもするから、それだけは……」

お願いですコーチ……イヤ……イヤアアッ!!」

脅える真奈美の両脚を軽々と肩に担ぎ上げた凌辱魔は、その凶悪な肉槍の先端を膣口へと向ける。

「助けて! 誰か助けて! アアッ、イヤ、やめて、イヤアアアッ!」

亀頭が処女の入口にあてがわれた。その驚くほどの熱さに、真奈美は気が狂わんばかりに絶叫する。

「やめて、やめてえっ! 助けて……栄治、栄治っ!

イヤッ、イヤよ……アアッ!」

「いいね、恋人の名を叫びながら絶望する処女を貫くなんざ……牡として最高の一瞬だ……!」

恐怖に震える様子を堪能しつつ、鬼畜男がゆっくり腰を進める。

真奈美は必死になって逃れようとするが、両脚を抱えた体育教師の腕力がそれを許さない。

(やめて、挿れないで……私処女なのに……初めてはアイツに……栄治にあげるんだから……ああっ、ダメ、それ以上は……!)

亀頭の半分くらいが膣穴にめり込む。

「ウウッ、痛い……痛いです、コーチ……お願いです、それだけは……処女だけは守りたいんです……アアッ、裂ける、アソコが裂けちゃうう!」

声を限りに叫んでも助けは来ない。

全力であがいても逃れられない。

哀れな少女にできることは、あとはもう哀願だけだった。

「女なら誰もが一度は通る道だ。この先に待つ快感に比べりゃ、どうってことはない」

だがこの人非人はその懇願を聞き入れるどころか、その肉棒をますます硬直させて処女肉を食らおうと腰を突き出してくる。

その狭い入口に比べて明らかに太すぎるペニスが、強引に侵入を企てる。

「ひぎっ！ ウウッ……あ、あ、ああ……ああああッ!!」

少女の純潔を守ろうと抵抗を見せるその膜は、しかし、男の凶器の前ではあまりに弱く、無力だった。

(イヤ……入ってくる……ダメ……入ってきちゃダメえええっ！)

真奈美の脅える姿を愉しみ終えた悪鬼は、遂にその剛直で女体を貫いた。

「はぐウ!!」

破瓜の瞬間、真奈美は確かに自分のなかでなにかが弾けるような音を聞いた気がした。

そしてその直後、処女でなくなっただけを思い知らせるような激痛に襲われる。

「イヤアアアアッ！ 痛い痛い、イヤアッ！ 抜いて、お願い、早く抜いてえ！ アアッ……アーッ!!」  
「へへっ、凄く締めつけだな。さすがに初物は違うぜ。さゆりの蕩けきったマ×コもいいが、やっぱ処女は最高だな」

暴力で女を辱めるといふ最も卑劣な行為をしながら、この悪鬼の如き男は笑っていた。

「痛い……裂けちゃう……裂けちゃう……ああっ、栄治、助けて……栄治い」

「おほっ、いいね、別の男のチ×ポ啜えながら恋人の名を呼ぶ……最高だね。チ×コ、びんびんになっちまうぜ」

助けを求めるその弱々しい声に、瀧沢の男根が嬉しそうに震える。

（ごめん、栄治……私の初めて、あげられなくなっちゃった……）

激痛や悔しさよりも、恋人に純潔を捧げられなかった悲しみが少女の胸に満ちていく。だがそんな無残な泣き顔ですら、この人面獣心な男にとっては情欲を掻き立てるエサでしかない。

「へっへ、そろそろ痛みも治まってきただろ？ 安心しな、俺は生徒に優しいコーチだぜ？ きちんとアフターケアもしてやるよ」

「な、なにをするつもりですか……あっ……イヤ、やめて……これ以上はもうイヤなんです、もう許して……ああっ、やめて……ダメえええ！」

肉棒を深々と突き刺したまま、また乳首を口に含まれた。同時に、それまではあまり触れてこなかったクリトリスを指でまさぐってくる。

「ははっ、なんだよ、犯されて興奮したのか？ 乳首もクリもぴんぴんじゃねえか」

「やあっ、やっ、やめっ……くううっ！」

レイプされているというのに、乳首は信じられないほど敏感になっていた。憎むべき男の舌をおぞましく感じる一方で、女になったばかりの肉体は鮮烈な快楽を得ている。

包皮を剥かれ、直接いじられているクリトリスはもっとひどかった。

（なんで、どうして……いつも自分で触ると痛いのに……なんでこんなに……っ！）

敏感すぎて普段はフードの上からでしか触れなかった女豆なのに、今はそこから信じがたいほどの悦びが込み上げてくる。

「アアッ、アッ、そこ、そこダメーっ！ イヤ、いじらないで、もう、もうイヤなお！ ああん、ダメ、ダメえ！」



交互に押し寄せる激痛と快楽に、真奈美は頭を激しく振って泣き喚く。そしてそのたびに片側だけ剥かれた豊かな乳房がぶるぶる重たげに揺れ動く。

「おほっ、マ×コ肉がほぐれてきたな。俺の極太チ×ポを美味そうに締めつけてくるぜ？」

「し、知らないっ……でたらめ言わないでッ！ あっ、それダメ……つまむのイヤっ！ うああっ、噛むのもダメ……ああっ、同時になんてひどい……はあああ！」

乳首とクリトリスへの執拗な愛撫に、次第に破瓜の激痛が和らぐ。

真奈美自身は気づいてなかったが、漏らす声はゆっくりだが確実に、甘いものへと変貌しつつあった。

「さーて、そろそろ本気でイクぜ？ 真奈美のマ×コを、俺のチ×ポにぴったり合うように作り替えてやる」

「なにを……あっ……嘘、まさか……アア、ダメ、やめ……あぎいいい……ッ！」

それまでは小刻みに揺る程度だった腰の動きがいきなり苛烈になった。

「イヤ、イヤ、イヤアアッ！ 痛い、まだ痛いの！ 動かないで、お願いです、やめて、アッ、アアアッ！」

「本当に痛いのか？　もうそんなに痛みはないはずだぜ？」

泣き叫ぶ真奈美の耳元で、瀧沢がふとそんなことを囁いた。

（そんなわけが……さっき、あんなに痛かったんだから……えっ？）

「そらな。お前のマ×コはもう俺のチ×ポを飲んで啜えてんだよ……！」

信じられなかった。

あれほど痛かったはずなのに、今はそれが半減していることに。

それよりなにより、

（嘘……感じてなんかない……私、こんな男に犯されて感じてなんかいない……！）

男のモノが狭い膣道を往復するたびに、下腹部に甘く痺れるような快感が生じていることが真奈美には信じられなかった。信じたくなかった。

「お前は才能あるぞ。これならすぐにイケる。いいや、俺がイカしてやる！」

瀧沢もそんな真奈美の急激な変化に興奮しているのか、声の上擦っていた。

「か、感じてなんか……ううっ、嘘、違う……あっ、あはっ、あはァ！」

(やだ、私、なんて声を……!?)

いくら認めまいとしても、一度意識してしまった時点で真奈美の負けだった。

感じてないと思おうとすればするほど意識は肉体に集中し、それが逆に欲しくもない快樂に気づいてしまう悪循環に陥る。

「あうっ、うっ、うううっ！ やっ、やだ……イヤなの……イヤなの……イヤなのに……イ」

(違うの、違うの栄治っ、これは違うの……!)

もう誤魔化しようがないほど、真奈美は感じていた。自分をレイプした男の勃起が、純潔の証を喪ったばかりの粘膜を擦る。剛直によって快樂を叩き込まれ、甘い喘ぎ声を漏らしてしまう。

「いいぞ、マ×コがいい具合にほぐれてきたぞ。そら、ココだったな？」

「ひいん！ ひっ……あっ、そこ、そこは……アアア！」

先程指で探られたスポットをカリ首で擦られた瞬間、真奈美は女の声を上げていた。

(イヤ、感じたたくない……栄治、助けて栄治……!)  
ここから僅か数十メートル先にいるはずの恋人を心のなかで呼ぶが、その悲痛な叫びが届くことはない。

「そら、締まってきたぞ。そら、そらっ！」

「ヒイイ！ ダメ、そこばっかり擦っちゃダメえ！  
ああっ、イヤなの、もうイヤァ！ 抜いて、もう許してえ！ おかしくなる、私、おかしくなるのお！」  
破瓜の痛みが消えたわけではない。激しいピストンで擦られるたびに鋭い痛みが脳に突き刺さるのだ。  
けれど、それを上回る悦楽が苦痛を覆い隠し、少女を悶絶させる。

「うーっ、うっ、ふうん、んっ、んふうううんん！」

知らぬ間に、生身の両脚がこの凌辱鬼の胴に巻きついていて。両腕が自由であれば、恐らく瀧沢の首に回されていたことだろう。

（イヤ、イヤ、イヤなの、こんなのイヤなのに……どうして、なんで私、こんなに感じてるの？ 初めてなのに……無理矢理犯されてるのに……っ）

瀧沢の抽送はしつこく、そして巧妙だった。

スポットのある浅い部分を小刻みなピストンで責め続けてから、不意に深々と挿入して真奈美の最深部を叩く。

その一方で乳首とクリトリスを間断なくいじり、ときおりうなじや耳たぶを舌で舐めるのだ。

（イヤァ……おかしくなる……私、なにも考えられなくなってる……）

一度目覚めた女の悦びは上昇する一方で、決して落ちることはない。

「あうっ、うっ、あううっ……！」

漏れ出る声も、どこか甘えるような響きがあった。

(ダメ、耐えなきゃダメ……このままじゃ……このままじゃホントにダメになっちゃう……！)

土俵際でかろうじて粘れているのは、ひとえに恋人の栄治の存在があったからだ。

「栄治、助けて……栄治……い！」

僅かな希望に縋るように、何度も恋人の名を呼ぶ。

「くっ、粘るじゃないか。……チツ」

なかなか最後の一步を踏み出さない真奈美に、瀧沢が舌打ちをする。

「おら、イケよ、さっさとイッて楽になっちまえよ、

おらァ！」

「ヒイイッ！ ヒッ、ひぎイ！」

業を煮やした瀧沢の獣欲剥き出しのピストンに、真奈美が甲高い悲鳴を上げる。

(イヤ、こんな男にイカされるなんて絶対にイヤ！

栄治、栄治い！)

子宮を突き上げられるたびにオルガスムスが近づくのがはっきりわかった。だがそれでも真奈美は歯を食いしばって堪える。

(負けない、身体は汚されても、心は絶対に渡さない……!)

水泳で培った精神力で必死の抵抗を見せる。

「くっ、この……おら、イケよ、イケって言ってんだ、おら!」

自身の限界も近いのだろう、瀧沢に余裕がなくなっていた。

(栄治……栄治……っ……あああ!?)

しかし、あと一步、あともう数十秒というところで先に肉欲に屈したのは真奈美のほうだった。

「えっ……あっ、ああ……あああ!? ダメ……そんな……アアア!!」

耐えに耐え続けた反動で、絶頂の大波が一気に少女に襲いかかる。

それと同時に、最も恐れていた言葉が少女の耳に届く。

「出すぞ! このまま子宮に中出ししてやる……ッ!」

「イヤ! なかは……なかはダメえ! お願い、抜いて……アア、なかはイヤ、それだけは許して……ヒッ……やだやだ、膨らんでる……やだ……やだア!!」

男の肉棒が恐ろしい勢いで膨張したのがはっきりわかった。

膣内射精の恐怖に泣き喚くが、瀧沢は逃がさぬとばかりに真奈美の腰を引き寄せ、これ以上ないほどに密着させてくる。

（出されちゃう……ダメ、なかは絶対にダメえ！ 妊娠イヤ！ 赤ちゃんできちゃう……栄治以外の赤ちゃんなんて欲しくないんだからあ！）

最後の力を振り絞って逃げようとするも、それより先におどましくも甘美なアクメが少女を呑み込んでしまった。

「アアッ……アッ……イヤ、イク……イッちゃう!？」



それは凄まじいほどの悦楽だった。膣内射精への戦慄すら一瞬忘れるほどの、甘く、そして淫らな絶頂。

(イク……イク……!!)

真奈美がオルガスムスを迎えるその寸前、鬼畜男のザーメンが処女の子宮を襲った。

「ヒッ……ダメ……あひっ……ひっ、嘘、なかに……ホントに中出し……ヒッ……ひぎっ……イヤ、イヤ……イヤアアアッ!! アーッ!! アアーッ!!」

「おほっ……すっげえ締めまり……!」

「ダメ、イクのイヤ、イクのはイヤアア! アーッ!!」

瀧沢の熱すぎる精液が胎内に注がれるのを絶望的な気分で見守りながら、真奈美は想像を絶するアクメに泣くことしかできなかった。